

立命館大学大学院
2022年度実施 入学試験

一貫制博士課程

先端総合学術研究科
先端総合学術専攻

入試方式	実施月	専門科目		小論文	
		ページ	備考	ページ	備考
一般入学試験	9月	P.1～		P.3～	一部窓口公開のみ (WEB非公開)
	2月	P.7～		P.9～	
一般入学試験(自己推薦)	9月				
	2月				
社会人入学試験	7月 (2022年9月入学)				
	9月				
	2月				
外国人留学生入学試験	7月 (2022年9月入学)				
	9月				
	2月				
学内進学入学試験	7月				
	9月				
	2月				
APU特別受入入学試験	7月 (2022年9月入学)				
	9月				
	2月				
転入学試験	7月 (2022年9月入学)				
	9月				
	2月				

【表紙の見方】

×・・・入学試験の実施がなかった等の理由で入学試験問題の作成がなかったもの、または、問題を公開しないもの
斜線・・・学科試験(筆記試験)を実施しないもの

問題冊子は回収します

2023 年度

先端総合学術研究科（一貫制博士課程）

一般入学試験問題（2022 年 9 月 11 日実施）

専門科目

入試方式	試験時間	解答方法
一般入学試験	9 : 40～11 : 10 （90 分）	問題を解答

（途中退室はできません）

【解答にあたっての注意】

1. 使用する言語のすべての解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
（使用しない言語の解答用紙には受験番号・氏名を記載する必要はない）
2. 試験中に気分が悪くなった場合は、静かに手を挙げて監督者に知らせること。

問1 以下の中から用語を3つ選択し、それぞれの意味する内容を400字以内で説明せよ。

Q 1. Select three from the following terms and explain the meaning.

インペアメント impairment

マイクロ・アグレッション micro aggression

文化資本 cultural capital

コンヴィヴィアリティ conviviality

ワクチンパスポート vaccine passport

ケア倫理 ethics of care

文化多元主義 cultural pluralism

ミメーシス mimesis

通過儀礼 rite of passage

ナラトロジー（物語論） narratology

記号論 semiotics

消費社会 consumer society

問2 以下の設問から1つを選択し、1000字以上1500字以内で論述せよ。

Q 2. Select one from the following questions and answer it.

(1) 質的調査と量的調査を比較し、それぞれの長所と短所を論述せよ。

Compare qualitative and quantitative research and discuss the pros and cons of each.

(2) 臓器売買について賛成ないし反対の立場を明確にして論述せよ。その際に、臓器のなかで、血液、腎臓、心臓の違いについても触れること。

Articulate and discuss your position, either for or against organ trafficking. In doing so, mention the difference between blood, kidneys, and heart.

(3) 災いや不幸が降りかかることに関する文化的な説明体系(災因論)に関する具体的な例を挙げ、それが果たす社会的機能を論述せよ。

Give a concrete example of a cultural explanatory system used to explain the causes of calamities and misfortunes and discuss its social functions.

(4) インターネットの登場が、ある文化的ジャンル(例:美術、映画など)をどのように変化させたか、ひとつの具体例に注目して論述せよ。

Discuss how the Internet has changed a certain cultural genre (e.g., art, film, etc.), focusing on one specific example.

問題冊子は回収します

2023 年度

先端総合学術研究科（一貫制博士課程）

一般入学試験問題（2022 年 9 月 11 日実施）

小論文

入試方式	試験時間	解答方法
一般入学試験	11 : 40～12 : 40 （60 分）	問題を解答

（途中退室はできません）

【解答にあたっての注意】

1. 使用する言語の解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
（使用しない言語の解答用紙には受験番号・氏名を記載する必要はない）
2. 試験中に気分が悪くなった場合は、静かに手を挙げて監督者に知らせること。

日本語の論述試験と英語の論述試験の <いずれか1つ> を選択し、文章を読んで設問に答えよ。

(日本語の問題を選んだ場合には、英語の問題には解答しないこと)。

Select either the Japanese or English examination, read the sentences and answer the questions. (If you choose the English examination, you don't need to answer the Japanese one.)

小論文 (日本語)

以下の文章を読み、設問に答えよ。

この問題は、公開していません。

この問題は、公開していません。

(出典：ポール・ヴィリリオ『アクシデント 事故と文明』(小林正巳訳) 青土社、2006年、24-33頁。一部改変)

- 問1 下線部①「速度は20世紀の人為的事故の指数関数的展開に対して責任がある」とはどのようなことか、具体例を挙げながら1000字以内で説明しなさい。
- 問2 この文章が述べている問題に対して、どのような「哲学的、文化的アプローチ」(下線部②)が可能だと考えられるか、1000字以内で自由に論じなさい。

Discussion Exam (English)

By early March of 2020, the reality that the world was at extreme risk of the COVID-19 global pandemic was beginning to be understood in many parts of the world as a sudden rupture to everyday life. Although the World Health Organisation announced a global health emergency in January 2020, news that all parts of the world were facing a pandemic of proportions not witnessed in living memory circulated in March prompting responses that can be understood as producing discontinuities with everydayness and, therefore, normative practices of identity, belonging, relationality and being. Governments in many countries responded in different ways, with some announcing urgent social distancing, bans on gatherings, closure of non-essential businesses and services, lockdowns of the population in private homes, border closures and quarantine measures. In many cases, bio-hazard and bio-security legislation was enacted and policing measures to enforce compliance were expanded. Over the year, responses to the various measures were mixed, including protests of lockdown and curfew measures and substantial support for governments that took action. Conspiracy theories about the origin of the virus or government interventions in several Western nations circulated, while simultaneously there was a substantial increase in public interest in fact-checking, factual information and medical knowledge. Debates about measures, government and private responses in all parts of the world have continued, particularly in the context of politics, health knowledge, impact on families and work, economic theory, histories of plagues and histories of economic depression. Engagement with knowledge, debate and discourse on these topics has undoubtedly had an impact on how people everywhere view their world, particularly those who are less likely to be exposed to the actual health realities of infection or mortality.

What matters, however, for thinking about subjectivity, embodiment, and emplacement in the world is not so much the disruption that a pandemic has brought and has been experienced in diverse ways in different parts of global as well as experienced differently depending on socio-economic, urban/rural and gender demarcations in local settings. Rather, if we are to understand the experience of the disruption at an ontological level, then it is necessary to make sense of the shared experience of *everydayness* as a normative, middle-class stability over time, and how it is *everydayness* that has been radically ruptured. I am arguing here that regardless of geographic or social setting, rupture itself has occurred for very large numbers of people in ways which fundamentally shift how identities of relationality and belonging are constituted, performed and

articulated. Such a destabilisation in the normative and everyday cultural resources that are deployed for the persistence of identity—which may indeed be a permanent break from normativities of the past —have significant ramifications for how we relate to each other, engage with our senses of self, and how we conceive ethical obligations of care for the self and others.

Reprinted from "Identity in the disrupted time of COVID-19: Performativity, crisis, mobility and ethics", by Rob Cover, *Social Sciences & Humanities Open*, Volume 4, Issue 1(2021), pp1-2.

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

Questions

1. How did governments around the world respond to the COVID-19 pandemic according to the text?
2. What is important for understanding the disruption caused by the pandemic with regard to subjectivity, embodiment and emplacement, according to the text?
3. From your personal experience or knowledge, can you provide an example for the permanent break from normativities of the past caused by the pandemic?

問題冊子は回収します

2023 年度

先端総合学術研究科（一貫制博士課程）

一般入学試験問題（2023 年 2 月 5 日実施）

専門科目

入試方式	試験時間	解答方法
一般入学試験	9 : 40 ~ 11 : 10 (90 分)	問題を解答

(途中退室はできません)

【解答にあたっての注意】

1. 使用する言語のすべての解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
(使用しない言語の解答用紙には受験番号・氏名を記載する必要はない)
2. 試験中に気分が悪くなった場合は、静かに手を挙げて監督者に知らせること。

問1 以下の中から用語を3つ選択し、それぞれの意味する内容を400字以内で説明せよ。

Q 1. Select three from the following terms and explain the meaning.

インターセクショナリティ intersectionality
自己責任 self-responsibility
理解社会学 interpretive sociology
プラグマティズム pragmatism
トロリー問題（トロッコ問題） trolley problem
予防原則 precautionary principle
人新世 anthropocene
機能主義 functionalism
クラ交易 kula ring exchange
ポップアート pop art
作者の死 the death of the author
アテンション・エコノミー attention economy

問2 以下の設問から1つを選択し、1000字以上1500字以内で論述せよ。

Q 2. Select one from the following questions and answer it.

- (1) 障害の社会モデルについて論述せよ。
Discuss the social model of disability.
- (2) 人間の権利と尊厳の違いについて論述せよ。
Discuss the difference between human rights and dignity.
- (3) 現代社会において「創られた伝統」が、観光や開発の文脈で活用される際の問題について自由に論述せよ。
Discuss freely the problems that arise when the "invented traditions" in contemporary society are used in the context of tourism and development.
- (4) 現代社会における様々な「刺激」について、具体例を挙げて論述せよ。
Discuss at least one of the various "stimuli" in today's society with specific examples.

問題冊子は回収します

2023 年度

先端総合学術研究科（一貫制博士課程）

一般入学試験問題（2023 年 2 月 5 日実施）

小論文

入試方式	試験時間	解答方法
一般入学試験	11：40～12：40（60分）	問題を解答

（途中退室はできません）

【解答にあたっての注意】

1. 使用する言語の解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
（使用しない言語の解答用紙には受験番号・氏名を記載する必要はない）
2. 試験中に気分が悪くなった場合は、静かに手を挙げて監督者に知らせること。

日本語の論述試験と英語の論述試験の <いずれか1つ> を選択し、文章を読んで設問に答えよ。

(日本語の問題を選んだ場合には、英語の問題には解答しないこと)。

Select either the Japanese or English examination, read the sentences and answer the questions. (If you choose the English examination, you don't need to answer the Japanese one.)

小論文 (日本語)

以下の文章を読み、設問に答えよ。

ワクチンには政治意識、倫理観、信仰心を喚起し、人の感情——時には希望、時には恐れや不安——をかきたてる何かがある。ワクチンは、もう食事の席で話し合える話題ではなくなっているという人もいる。ワクチンをめぐって対立する見解が緊張を生み、ワクチンを接種するかしないかによって、他人や友人との関係がぎくしゃくするおそれがある。公的なレベルでは、ワクチン義務化により、政府の統制に対する旧来の、あるいは新しい感情から反対運動が生じ、個人レベルでは、ワクチン接種という行為が個人の感情や信念のさまざまな層を刺激する。

このような感情は、高所得国にかぎったことではない。きわめて貧しい国においても、ワクチンを接種しない人を罰するために、ワクチン義務化、罰金、場合によっては禁固といった措置がとられてきた。これに対して、強制的な措置への抗議運動や個人の自由や尊厳を求める動きが起きた。

一部の地域では、住民が予防接種プログラムに参加する交換条件として、水や電気などの生活必需品を要求することで、抗議の声を上げた。彼らは、自分のためではなく、政府や国際機関のためにワクチンを接種するのだと感じており、ポリオ予防接種キャンペーンのような人目をひく活動を個人的・集団的な不平不満を表明するよい機会と捉えている。

2019年4月、パキスタン北西部の地方政府の代表者たちが、電力供給が正常な状態に回復するまで、ポリオワクチンをボイコットするよう呼びかけた。たびたびの停電により、ポンプや水の供給に影響が及んでいたため、彼らはポリオワクチンのボイコットを行うだけでなく、「抗議のために、教育機関や医療センターを含む、すべての公用建築物を閉鎖する」ことを訴えた。これは数十年にわたるポリオ撲滅活動に対する多くの抗議活動の一つであり、地域社会のより幅広いニーズ——ならびに尊厳——への理解を求める叫びだった。

今日、私たちは、非常に効果の高いワクチンを有しているながら、国民がそれを信用しないという皮肉な状況にある。それでも、ワクチンを信じる人は依然として多数派である。ワクチンに疑念をもつ人々の多くは、「反ワクチン派」というレッテルを貼られることを拒否しているが、反対意見をいう人は増えている。そして、多くの疑問をもっている。これほど数多くのワクチンが本当に必要なのか？ 安全性に問題はなにか？ ワクチンの背後にある真の動機は何だ？ 政治的な利益なのか？ 政府機関や製薬会社は経済的利益を得ようとしているのか？ 私たちの選択の自由を制約し、信仰や信念に義務を課すとは、どんな国家だ？

ワクチンをめぐる議論は、地域的な問題だけでなく、政治運動、宗教、文化の問題、セレブの活動、現代技術よりも昔ながらの母なる自然に価値を置く思想なども結び付けられてきた。気が進まないながらワクチンを受けつづける人もいるが、反ワクチンの見解を他の感情と結びつける極端な人もいる。その感情は、ワクチンの範囲を超えて、環境保護グループの主張(反化学物質や反水銀)、政府による支配への反感、中絶反対、移民の受け入れ反対など多岐にわたる。パキスタンとナイジェリアでポリオワクチンの接種に携わっていたスタッフが殺された事件のような最悪の例では、ワクチンを供給する人々が暴力の標的になっている。そして、「兵器化」の新しい形として、ロシアのボットは、オンラインでのワクチン論争において故意に世論を分断する噂や悪感情を広めていたことが明らかになった。ボットの行動を追った研究では、ボットが単にネガティブな感情を増幅させるだけでなく、ワクチンの賛成派と反対派の意見をさらに対立させる狙いがあったことがわかっている。(中略)

本書において、私は、「士気の指標」、つまり市民感情を知る貴重な手がかりとして噂にフォーカスすることを選択した。あまりにも多くの場合、噂にはネガティブとか不正確といったイメージがつきまとい、よくないものとして受け取られる。噂を研究する——それがどのように始まり、どんな理由で生きつづけ、どのような影響力をもつか——人類学者として、私は噂の重要性を次のように見ている。すなわち、公的な情報源から提供されない場合に答えを求める手段、不確かなリスクに直面したときに集団で意味づけをする手段、より公的な経路ではまだ認識されていない予見できないリスクについての新情報を伝える合図としての重要性である。噂は、パニックや二極化を誘導するなど、悪意ある方法で利用されることもあるが、私たちは、噂をもっと真剣に受け止める必要がある。かなり否定的な噂ですら、語るべきストーリーをもっているのである。

【出典】ハイジ・J・ラーソン『ワクチンの噂：どう広まり、なぜいつまでも消えないのか』(小田嶋由美子訳) みすず書房、2021年、8-12頁 一部改変

問1. この文章から、著者が「ワクチンの噂」を研究課題とした背景と問題意識をまとめたうえで、COVID-19の世界的パンデミック以前に行われたこの研究は、どのような目的を持つと考えられるか、あなたの知識をもとに論述せよ。(1000字以内)

問2. 自由なテーマで、「噂」を研究対象に含めた研究計画を創案し、意義を含めた構想を述べなさい。(1000字以内)

Discussion Exam (English)

The *Kimetsu no Yaiba* (henceforth, *Demon Slayer*) film's sustained attainment of the number 1 spot at the box office and claim to the highest grossing film of all time in Japan marks an important achievement for late-night TV (*shinya*) anime. While two other anime, *Sen to Chihiro no Kamikakushi* (2001) and *Kimi no Na wa* (2016), have reached similar levels of sales and popularity, neither of these works were based on an established latenight TV anime like *Demon Slayer*. This achievement has invited questions in various publications online of what makes *Demon Slayer* so special as to achieve this degree of fame, and more broadly, how this anime is capturing something of the national culture of Japan at this moment.

Indeed, part of the interest in the film is how well it did at the box office within Japan, placing its ascendancy within a national framework. This in turn spurs global interest, as the film begins to generate buzz outside of Japan based on its ascendancy inside Japan. Moreover, the fact that this is an anime that looks very similar to other mainstream anime (largely late-night TV anime) falls right into contemporary notions of anime as representative of Japanese culture, both nationally and internationally. Certainly, this is the case in reports on *Demon Slayer* in the popular press. In this sense, part of the interest in *Demon Slayer*'s film exposes a very important set of tensions for anime, that between the local (specifically Japan) and the global.

It is hard to ignore the importance of the national scale here, and the film's extended popularity provides a point of departure for thinking about anime in regards to the national within Japan. It also gives credence to a notion of anime as part of Japanese national culture, both locally and globally: the film must have struck some chord across Japan for it to be in the number 1 spot for so long. Furthermore, the film's popularity aligns with the standard view of anime's globality, that it is a Japanese (local) culture now gone global, with the rest of the world slowly gaining access to the film that was so popular within Japan. Subsequently, the impression is that, despite anime's global presence and demand (which goes back decades now), anime, even outside of Japan, is still seen as Japanese culture—a stasis in anime's status as Japanese, despite the global movements and presence. As such, there is a tension here between anime as a local cultural product of Japan, while simultaneously being a global media.

【出典】 Suan, Stevie. 2021. "Colorful Execution: Conventionality and Transnationality in *Kimetsu no Yaiba*." *Transcommunication* 8 (2): 179–180.

Questions

1. Which tensions does the interest in *Demon Slayer* expose, according to the author?
2. Which factors play into the recognition of *Demon Slayer* and by extension anime as Japanese culture, according to the author?
3. How would you approach anime if you aimed to deconstruct its Japaneseness?